

守隨憲法著作集

第四卷

近松 半二の脚色譜表
近世戯曲作者の発生
浄瑠璃 曾我物の浄瑠璃
操り芝居の舞台構造
浄瑠璃 歌謡

守隨憲治著作集

第四卷

守随憲治著作集 ●第4卷

昭和54年2月20日 初版発行©

¥ 7,500

検 印
省 略

著 者 守随憲治

発行者 池田猛雄

発行所 有限会社 笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

☎ 03-295-1331(代) 振替東京 1-56002

3091-957030-0924

小田製版印刷・手塚製本所

刊行のことば

近世国文学界の泰斗守随憲治博士の業績中、偉大な足跡がしるされているのは、歌舞伎と操り浄瑠璃という、江戸時代を代表する二大演劇の分野である。昭和六年の『近世戯曲史論』をはじめ、『歌舞伎劇戯曲構造の研究』『歌舞伎通鑑』『歌舞伎序説』など、文献学的実証性を基盤としながら、総合舞台芸能としての特性にも充分な考慮を払われ、越味に流れがちな演劇研究の科学性を樹立された。就中、昭和六年刊の『歌舞伎図説』など、画証資料の学術的考察の、先駆的、記念碑的な業績であった。

ここに、博士の著述中の代表作を選び、本集五冊、別集一冊の全六冊の『守随憲治著作集』を刊行することは、国文学研究の現状にあつて、大きな令目的意義があると信ずるものである。

昭和五十一年秋

守随憲治著作集刊行会

守隨憲治著作集 第四卷 目次

刊行のことば

義理

近松

近松半二の脚色譜表

近世戯曲作者の発生

作家系譜序説

浄瑠璃

曾我物の浄瑠璃

操り芝居の舞台構造

浄瑠璃・歌謡

編集後記

一

一五

三七

三五

三九

四七

四三

四七

義

理

緒

この頃は義理知らずが多い。もっとも義理とはどんなものかといったようなことは、誰しも解説する。「義理知らず」という時の「知らず」は、そういう解説ができるできないではない。解説などは下手でもいいので、ささやかな義理でも、それをきちんと果たせるなら、よく義理を知ったことになる。生存競争の激しさというものはとかく人間の肩を出したがる。この競争に勝つということを、動物的に食を漁る意味にのみとるからではなからうか。名譽と地位のために更に金のために、友を裏切り、先輩を売り、師の小股をすくうような才子がいかにも多いことか。末梢神経だけで生きている者には、ことさらそういう手合いが多いようだ。そんな連中が箔をつけてみて、一国の文化がどれだけ水準を高めるだろうか。むしろ反面の害毒の方が深く浸透するだろうと思う。こういう状態はなんとか打開されなければと、かねてから念願していたが、今回の世界的動乱の波及は、精神界の改善にも、よき面の方向として、多少は認められるものがあると思う。日本の性格といったような語がよく使われているが、これとて、もともとそんないいじいじしたものではないはずだ。愚にもつかない名声を残して一生をおえるのと、無名の礎石として永遠に仰がれるのと、どちらが生きて甲斐のある生活であらうか。

甲鳥書林の石塚君はさる同僚の御親類である。先頃、ふと拙宅を訪れて何か原稿を寄せせという。差し迫って出したいものもないが、強いられて、重いものや軽いもの二、三の書きかけしを見せた。その一つが本書になった。この書の内容はあちらこちらの雑誌のようなものに出したものなので、もともと統一はないが、まあ並べてみればこんな

ことになった。もちろん研究論文集として編んだのではない。随筆である。随筆としてとのえたものである。この中の「義理」を頭にすえたのは、前にいったような気分からにほかならぬ。僕は義理知らずといわれて、変な偉物になることなどはまっぴらだ。そんな気持を抱いている。

昭和十六年初夏

守 随憲治しるす

目次

緒	三
義理	七
風流	三
東の地味・西の地味	六
江戸文学に現れた卑賤美	九
狂歌の論	三
近松浄瑠璃の形式	六
海音の浄瑠璃	九
出雲の浄瑠璃	二三
半二の浄瑠璃	二三
戯曲史と国文学史	五〇
古典の社会的意義	五五

義理

一

義理という言葉の構成には常に人情が絡む。そこで義理人情ともいう。ここでも義理を考えていくのが主眼であるが、そのためには人情の交渉を留意しなくてはならない。いったい義理というものは、かなり具体性を持ち個別的な性質を持っている。これはやや高次的に解釈される「義」についてさえも、いえるので、種々の徳性の中でも「義」の特殊性はそこに根ざしていると思う。この「義」の発見、制定は、孟子にありと言われているが、孟子が「義」を発見した過程が、既にそうであったように、「義理」の発見が、やはり具体的な実生活に根ざしていると思われる。もちろん「義」の分派は相当広く、多くの項目に分かれたるのであるが、それらも抽象的な観念的なものとして輸入されたが、ただちに具体的な存在として作用力を持つようになった所に、独特の意義があると思う。その中で、ここに挙げた「義理」が最も直系的な形式であるとみてよいであろうから、そうすると、又、こういうことになる。わが国における「義」の発生が、必ずしも観念的な思想的な教育指標として移入されただけで、始めて認められたものでないというように考えられ、それを同時に義理の発生という立場に置きかえることもまんざらできないのではないのだと、いつてみたいのである。

義は又正義とか道義とか、いい換えられるであろうが、それらはかなり一般性を持ち、包括性を持ち、その意味にお

いては抽象的の傾向の濃いものがあるが、それに比べると義理は遙かに具体性に富む。しかして、わが国では、義の存在が実生活の中から認められてきて、その通りの関係において、義理が確認されたと思われるから、ひとまず義の発生事情を考えておく必要がある。

平安朝末期に至っての精神界の墮落、実生活の靡頹が侍を独立させ、武士としての登場を促したのではあったが、公卿社会と武士社会というように、日本全土が截然と両分したには、それほどまでに侍をして、文化人たる公卿を見離させた動因が潜んでいたはずだと思う。彼ら公卿が文化人としての伝統を誇り、又世の中が、その事を認め許していたのはその文化が単に形象の上にあったからではなくて、彼らの精神生活に密着していたからである。その精神的な文化が、道にのっとっていたからである。そこにこそ、心から侍い仕えるべきものがあつた。やがて藤原氏は道を捨てて顧みなくなつたのであるから、自ら仕える所を失つた侍達は、むしろ自身の生活の中に、道を求めざるを余儀なくされたのである。もちろんそうした意識を持った者が、侍のすべてではないので、大部分の者は、まず剣を抜いて立つたのだ。その中の統率者、又その第一線の人達が、こうした求道者であつたと思う。

この第一線の侍達は、決して非文化人ではなかつた。かつて藤原氏の文化に負けた経歴を持っていたが、もともと藤原氏とも列を同じうすべかりし血統の人々であつたので、当然文化人としての素質に欠けてはいなかつたはずである。もっとも、一般の多くの侍は、非文化人と指されても仕方なかつたであらうが。そこで第一線の侍達は、まず自己の内的生活の統整のために道を求めたが、更に外部の、対人的生活のためにも、これを求めた。この方面は、武士生活の複雑化進化和共に、まず要求せられたのである。それは、剣と剣との争い、乃至は武器の抗争というものの限度を見出すにつけて、その限度を超えねばならぬ場合の、唯一の目標であつたのである。剣が集まり、人が集まつた時の、軍の合戦となつた場合も同様である。必ず勝たねばならぬもの、負けても勝つ、死んでも勝つ、その定めをつ

かんで、始めて、絶対に勝てる。この定めこそは、道なのであった。ここまでくれば、内的と同時に外的の生活指針となりえた。義という。正義という。義は不義に対して、常に又最も強いのである。文化の墮落した、不義なる生活を追った藤原氏が崩壊したのは当然である。

一般的に教養の低かった武士が、簡素にして容易な、文化や宗教を迎えて、義を整頓して、形づくって、改めて、全生活の基調的な指針と定め、堅固な階級的地盤を占めたのが、鎌倉武士であると思う。この指針を武士道と呼ぶ。すなわち、武士の道なのである。こうして道を得たがゆえに武士は強くありえたのである。この道は言うべくして実行の難いものであったが、率先して実生活上に範を示したから、その実力の可能性がやがて、彼らの階級をして最高位を占めさせたのであって、武士の地位はまずかくして決定せられたはずなのである。

けれども武士も人であった。人間的な弱さは元來の教養の低さに誘われて、自ら道を棄て道を破り、無道の世界に迷い込んだ果てに、眼覚めて再びこれを力強く把握したのが徳川氏であった。彼は朱子学を入れて、家訓を成すに当たってこの武士道を観念的から具象的へと十分に引戻すことに成功したから、源家三代の轍を踏まず、元より北条氏や足利氏のごときは戒むべき先例であったし（徳川氏末期の事情はここには触れぬこととして）、名実共に、始めて生きて作用した人世観世界観を成したのである。しかもこの結果は、武士という為政者階級の道でのみなしに、庶民の間にまで及ぼして、彼らの一般生活の規範たらしめたが、日本の精神生活史としては、ここに大いなる意義があると思う。こうして道あるいは誠といふ名目を、最も具体的な対人関係の性質において、一々の条理として解説したものが義理といわれるのである。

しかるに義理の実現は、ほとんど常にその対蹠的なる位置を占める人情との相関関係によって、成立するので、それらとの相剋の状況下に認められるのであるから、これを一個の理想主義形式として説き去る人もあるが、濃い現実

性に根ざしていると思う。その点から、人情をやや拡張した意味に解釈してみても、さて義理の一般的な種類を、個性をもつものと社会性をもつものとに分けて、考えていってみよう。

二

個性をもつものというのは、特に情との交渉の場合を指してみたいのである。情といふ語は誠に漠然たるものだが、ここには人情といってしまつては少し広義に過ぎる感があるので、愛情の方面に傾けての意義に狹めておいて、すなわち愛情と相対的な位置に立つ場合の義理のあり方について考察を進めてみる。更に分類して縦の關係と横の關係というふうにする。

縦の關係の主なものとしては、親子關係があり、君臣關係がある。親子の情というものは、説明の要もない、密接なものの絶対的なもの、一般的なものである。親が子に注ぐ愛情の厚さは、始めからその反応を予期してない。だから時には弱い者程可愛いともいう。事業の成功者と不成功者とは、兄弟の子供の中にあつたとする。親は不成功者の子供の方に、一層熱い涙を流すものである。そういう愛情に対して、子供は絶大の謝恩を感じ、これを実行する。これは子としての務めであるが、その務めという中には、事務的な、交換的な解釈はいささかも潜んでいないはずであり、いてはならないのである。やむにやまれぬ衝動としての現れである訳である。しかし親が子に対するもののほどには、子から親へは深くないのが通例のようである。今いったような衝動的な性質を感じる場合は、多くは、「子を持つて知る親の恩」の文字通りの解釈で、人の親となつて子への親の愛を感じ、意識して後に、これを位置を転じて、親たる我を、子の立場に置いて親を仰ぎ見て知るものである。であるから、その場合の子から親への情は、必ずしもそのものだけの純なる發生でないことがある。この時に、親に対する子の道の存在が認められるのである。しか

してその道が情を伴って一つの高次の愛情を成す所に、孝の成就があると思う。まずその道の存在を認める所に、人間世界が動物世界と異なるものを知らねばならないと説かれる。なるほど大猫の子は親の乳を離れてからは対等の存在であり、全くの隣人である。この事は、又親が子に対する場合にも考えられねばならないといわれる。溺愛は戒められる。溺愛を感じてもこれを実行に移してはならない。ならないという道があるのである。この道を守ることによって、真の親から子への愛となる。これこそ高貴なる愛であると考えられる。

日本にあつては、家を単位として国柄が成立っているのであるから、忠孝一本という語もあるように、親子関係の完成はただちに君臣関係の充実に及ぶので、そこに家における親子関係の組織が、厳然たる位置を占めるのである。徳川時代にはいつてから、家の觀念が形式としても、十分に整理せられた結果、親子関係にも義理の発動が種々な形で現された。文学の題材としては、好個の問題が提供せられた。もちろん文学となる以上、ある種の事実が素材であつても、これを幾重にも解釈を重ねて、そうした義理の解剖へと主題を導いている。それが、事実以上である場合も当然起こりうる。しかし名編に対して觀衆が感動した時、既に事実以上の事実として、立派に生きているのであつて、その觀衆の偽りなき生活の一部をなすのである。そうした状況を考える時、義理は實際に、文学から実生活に侵入していったとも思う。

近松の「冥途の飛脚」を見よ。忠兵衛は新口村へ実父への暇乞いに行ったものの、忠三郎の家の櫺子窓につかまつたままで、「ハア悲しやと忠兵衛もがけども騒げども、身を顧みて出もやらす」と眼前に転んだ実父孫右衛門の側へ駆寄る事もできないので、梅川が出て行ったが、「身を顧みて」とは、既に亀屋に養子に行ったわが身の位置を顧みたゆえである。その婿を越えたいが越えられぬと考えるのは、まず忠兵衛が亀屋すなわち養家、乃至は後家妙閑という養母に対しての義理であるが、更にそのわが義理を通して、実父孫右衛門が亀屋に対しての義理も考えられるの

である。孫右衛門が親としての忠兵衛に対する立場も同様だった。鼻緒をすぐれる梅川の風俗からそれと察して、わが子忠兵衛に会いたい情の山々を、押さえ通す。それは亀屋への義理である。一度久離切った以上は他人でなければならぬ。養家の親子の間柄に水を差すような態を、かりそめにも振舞ってはならない。

密に便宜もするならば、親は泣き寄り親子なり、殊に母もない悴、隠居の田地を売つても首綱は付けさすまい。

今では世間広うなり養子の母に難儀をかけ、人に損かけ苦勞をかけ、孫右衛門が子で候とて、引込んで置かれうか、一夜の宿も貸されうか、皆あいつが心から其の身も狭い苦をしをる

という怒りは、義理の声である。しかも「憎い奴とは思へども可愛うござる」と泣き沈んだあげく、早く落ちるようにとて、寺への奉加銀一枚を托したが、又、

どうぞ無事な吉左右をと涙ながら二足三足、行きては帰り「なんと逢うても大事あるまいか」「なんの人が知りませう、逢うてやつて下さんせ」「ア、大坂の義理は欠かれまい、どうぞ逆様な回向させなと懇に頼みまする」

と咽返り

というに至っては、子ゆえの愛情が、まさに義理の枷を払おうとして、瞬間踏み留まった形である。後の改作の「大和往来」の現今の演出では、孫右衛門はわざと目隠しをして忠兵衛に会う、会っている中、目隠しの切れをそっとのけたりして愛情の切なさをみせる。原作を更に説明的に改作したものであるが、實際親の態度としては、こうもあつたろうと思う。家を立てるための養子制度は、しばしばこうした複雑な義理の形式を紹介している。

親子関係から君臣関係に移ってみる。君臣関係にみられる義の最高位は、おそれおおいが朝廷に対する臣民の位置において考えられる。わが国では「公」は「大家」で、我々の家々の大いなるものという関係が事実において証明されているのであるから、ただの主従という関係ではない。この点諸外国人の通り一遍の解釈では分明されぬ国柄であ